

地理学における風景概念についての一考察

大 嶽 幸 彦*

(昭和63年10月21日受理)

要 旨

本稿は、アンケート調査をも含む実証的研究の立場からではなく、内外の文献を基に、風景概念に関して若干の考察を試みた。本稿では客観的色合いの濃い景観という地理学独自ではあるが、使い古された用語ではなく、人間をもその中に取り込む風景という用語を中心に、議論を展開した。地理学の著作のみならず、文学作品をも研究の資料として検討した。

KEY WORDS

Landscape Concept	風景概念	Keikan	景観
Fūkei	風景	Historical Method	歴史的方法

1. はじめに

筆者は先に人間主義の地理学の観点から距離、場所、空間の概念との関連で人間の考察を試みたことがある¹⁾。その際、人間集団が自然を改変した結果としての景観という意味での風景 Landscape 概念については、ほとんど検討できなかったことに言及した。そこで本稿は、様々な風景概念について、地理学の著作のみならず文学作品をも研究資料として、若干の検討を試みたものである。というのも、辻村太郎が名著『景観地理学講話』の中で述べている如く、「畫家や文學者が書いた旅行記の中に、意外に立派な景観記載を見出すことがある²⁾」からである。また、歴史地誌の実際的定義の中にも、地域区分や全体的景観への叙述と関心を強調することが含まれており、この幾分包括的な定義によれば、既存の文学作品の多くが含まれ、静態的・動態的分析の両方から成っている³⁾点からも、本稿において研究の素材を地理学以外に文学作品からも蒐集した所以がある。次に、本稿に関連するいくつかの先行研究について取り上げておきたい。

まず、竹内啓一は1984年度歴史地理学会の大会課題「空間認知の歴史地理」の発表テーマを解題し、史資料についていえば絵図を取りあげた研究は多いが、その他の地図さらに絵画作品、さらには文学作品を素材として取りあげた研究は決して多くないと述べている⁴⁾。山野正彦はフンボルトの自然記述をいくつか紹介した後に、その特徴が科学的定義や因果的説明の他に、色彩豊かで匂うがごとき景観像を絵画的に描写している⁵⁾とする。高野史男は中南米を巡検しつつ、多数の写真を併用しながら景観の描写を試み、次のように述べている。「地理という学問

* 社会系教育講座

は端的に言って、それぞれの土地の上で人間（集団）がいかにかに生きているかについての学問であるといつてよいが、われわれはそれを様々な方法を用い、鋭くときすまされた学問的感受性によって明らかにする。そして歴史（時間）を積み重ねて生きてきた人間（集団）の生き方の、ある意味での法則性を求めるのである⁶⁾とするが、同感である。後に論ずる如く、地理学は風景という用語よりも景観という用語を Landscape (Landschaft) に適用してきたが、本稿は風景概念の有効性を検討すべく草したものである。というのも、若いときに体験した風景はのちになって他の風景の一つ一つがふさわしいもの、あるいはふさわしくないものとして経験されることになるイメージを刻印づけているだけではなく、人生の全体にたいして、もろもろの精神的世界を構成するための確実な基礎になっている⁷⁾からである。つまり、人は累積した様々な過去の風景の沈澱物の中から、発酵する思考を基に実存していると思われるからである。

例えば、週末やバカンスでの車や観光バスによるエクスカージョンによって、風景がいかにかに累積されるかに関しては、心理学者のモル、ロメルは次のように述べている。「車の前窓を多少ともゆたかなイメージや風景や光景の束が横切り、かれの知覚のなかに流れ込む。旅は空間の体験、それらの知覚の総量、すなわち存在が自分の意識のなかに消化した風景の総量によってはかられる体験である⁸⁾」。風景は旅からもたらされる気晴しでもある。風景という言葉の中には、美学と感覚の両面を含んでおり、たとえば芳香、臭気、風、拡がりといったものがそれである⁹⁾。経済学者の内田芳明は風景を現象学の立場から分析するという新しい見方を提示し、次のような卓抜した見方を披瀝している。「人が旅において都市や建物や樹木や原野に出会うとすれば、それらの事物は、すでに一つの諸関連と構造をもった生きた全体、一つの生きた個性体であるはずである。その生きた全体とは風景にほかならない。人が旅において出会うのは一つの風景なのであり、ある風景のなかの事物に出会うのである。そしてこの風景こそは、歴史的・文化的人間の生と自然的・風土的生との一つの総合、一つの結合として現象するものなのである¹⁰⁾」。

次に、地理学の著作や文学作品の中から風景について論じたものを抜粋し、整理してみたい。

2. 風景についての地理的描写

西川 治は内外の紀行文、旅行記、日記類の概要を紹介しつつ、久米邦武の『米欧回覧実記』を詳しく取り上げている。その書は、いわば“回覧比較地誌”あるいは映像（地図 10 枚、図版 314 枚、うち風景図 309 枚）で展開する移動式地誌とも称すべき動的地誌のモデルとしても、再評価する必要がある¹¹⁾と解説している。ここでは久米邦武が多数の風景図を使用している点に注目したい。次に、西岡秀雄は日本文学と風土について、著名作家による風景描写を取り上げている。例えば、佐藤春夫については、多摩丘陵の田園を背景として、自然環境を十分に観察理解した上で『田園の憂鬱』を書き、氏独特の文学の境地をきりひらいたので、単に人間関係だけを追った作家とは大きな差が認められるとしている¹²⁾。源氏物語以来の伝統ともいえるべく、日本での私小説によく見られる心理描写の刻明さと、他方での背景となる風景への無関心さ・叙述の粗さとの対照を想起されたい。

筆者はかつて、和辻哲郎の『風土——人間学的考察』の記述には様々な誤りが散見するが、これまで長年月にわたって多くの読者に読み継がれてきて、古典の一つになったのも、哲学の

書物には珍しい体験記風の生き生きとした描写が見られる筆致の見事さにある¹³⁾ことを既に指摘したことがある。ヨーロッパの風土を牧場と規定した箇所は、特に地中海地域の風景描写にすぐれている。例えば、地中海地域の樹木の形について、次のような記述がある。「それは植物学の標本のように端正で、従って規則正しい。特に著しく目につくのは笠形の松と鉛筆形の糸杉とであった。円く饅頭笠式に整った松は、ただに公園においてのみならず、野原にも山の頂にも多数に見られる¹⁴⁾」と述べ、ルネサンスのイタリアの絵に背景として描かれるシンメトリーの樹の姿は、イタリアにおいては自然的でありつつ合理的な印象を与えると解釈している。また、風景として、はげ山の風景は緑に比較的恵まれた日本では特異なものである。瀬戸内海沿岸や東濃のはげ山について、千葉徳爾は製塩、製陶による乱伐という通説を批判しながら、「岡山地方、ことに児島半島の丘陵地が、いたるところではげ山の風景を呈していたことは、私自身ありありと思っておこすことができる¹⁵⁾」と述べている。

研究方法として風景ないし写真を利用したものには、以下のものが挙げられる。

まず最初に挙げるべきは古典的名著の一つ、小田内通敏の『帝都と近郊』であろう。都市化研究の嚆矢である本書の中では、多数の写真や耕作景が見事に生かされている¹⁶⁾。次に、石井實は日本における地理写真の発達を体系づけ、「地理写真は、地域あるいは空間に関する思想の表出形態として、言語や地図および図表類と同列に、時にはより効果をあげる役割をもっているにもかかわらず、地理写真が学界において、いわば市民権を主張しなかったことに問題があったといえる¹⁷⁾」と述べている。尾留川正平は学位論文の中で砂丘地帯の耕作景を描いたり、114枚の写真を使って裏日本における砂丘の土地利用景観・耕作景を紹介している¹⁸⁾。先に取りあげた『景観地理学講話』では146葉の写真が挿入されており、それぞれ説明がなされている。田辺 裕はヨーロッパの風土を記述する中で、多数の写真や絵画を使って、あたかも目の前に風景が浮かび上がるような書き方を進めている。また、季節の描写にランボーやボードレールの詩なども引用している点に、地理学の著作と見た場合の新鮮味がある¹⁹⁾。水津一朗はヨーロッパ各地の博物館や美術館を探訪しながら、そこに掛けられている絵画を鑑賞しつつ、風景の解釈を行なっている²⁰⁾。正井泰夫はアメリカとカナダの風土について多数の写真・図を使用しながら、景色の解説を行なっている。例えば、ロッキー山脈について次のように述べている。「Rockyということばからは、全くといってもよいほど連想できないような緩やかなところも多いのである。……（中略）……サンタフェ大陸横断鉄道がロサンゼルスからニューメキシコ州中部を通過して大平原へ抜けるころでは、雄大な高原を走るという状態であって、いくつものトンネルや鉄橋を通過して大陸分水界を横切るというような景色ではない²¹⁾」。言葉だけで風景を想像することが、いかに錯誤をもたらすかへの注意といえよう。

ところが、内田順文は最近の論稿の中で、「我々がその場所イメージを冗々と説明することもなく、地名や場所の提示によってある程度の場所イメージを互いにやり取りすることができるのは、この共通な場所イメージが存在するからであり、地名や場所と場所イメージとのコードがある程度相互に解読されるからにはかならない²²⁾」と述べているが、果してその通りであろうか。例えば、本稿で対象にしているライン河周辺地域における風景を取ってみても、人によってそのイメージは様々ではなかろうか。竹内啓一はヨーロッパの風景について論じた中で、次のように述べている。「ヨーロッパの風景に関する情報の量と質には、大きな個人差があるのはもちろんのことであるが、日本人、あるいは、年齢、職業、社会階層のちがいかたちで、社会化されたヨーロッパイメージの検討をおこなうことも可能である。情報の量と質、アクセ

スの程度は時代によって大きく異なるので、おなじ社会集団についても、ヨーロッパイメージの変遷が問題になる²³⁾。次に、景観概念と風景概念に関して、考察を加えておきたい。

3. 景観概念と風景概念

一般に Landscape には景色、風景、見晴し、眺めといった意味があるが、景観という訳語は辞書にはほとんど無かった。地理学は Landscape ないし Landschaft を景観と訳し、様々な概念規定、内容の変遷を試みてきたが、西川 治の述べる如く、代表的な独和・英和辞典でさえ、ラントシャフトないしランドスケープの訳語としていまだ「景観」を採用していない²⁴⁾ 事実は注目するに値しよう。地理学の辞典では、景観について可視的な、地域ごとに特性をもつ地表上の風景と説明してはいるが、訳語としては景観を適用している²⁵⁾。The Dictionary of Human Geography では、Landschaft についての研究小史は論じられていても、肝心の用語の定義は明瞭ではない²⁶⁾。飯本信之は Landschaft を景観ではなく景域と訳したいきさつを語った後で、次のように述べている。「景域は特定の機能を発揮しうる限界のある地的空間であり、しばしば特有の景観系列を呈する。したがって、景域の特性をみるために景観をつかう必要がある²⁷⁾」とし、結局は Landschaft の訳語として景観を使うことを認めている。

ところで、景観概念と風景概念との相違は奈辺にあらうか。景観という用語のもとの記述は、ある地表空間を眺める人は表面に出ず、終始、客観的な立場で記述がなされる。一方、風景という用語の中では、ある地表空間を切り取る人間個人の主観が全く無視されているわけではない。けだし、人間も風景の一部を成すからである。しかしながら、景観の定義に関し、辻村太郎が「正確な定義は未だ決定して居ると云へないが、大體に於て眼に映ずる景色の特性と考へて差支ない²⁸⁾」と述べている如く、元々景観という用語の定義の中に、景色ないし風景という用語が入りこんでおり、景観と風景との間には明瞭な区別はあまりなかったといえよう。しかし、わが国の近代地理学のなかで中心的な概念であった「景観」という言葉が、アカデミズムの地理学のなかで馴養され、さらにそれが近代の測量地図の上で論議されるにあたって、風景という言葉の意味は次第に地理学の中で風化していったのである²⁹⁾。千田 稔は志賀重昂と正岡子規の風景に関する分析を試みているが、両者の共通点は〈風景の発見〉ということと共に、風景を地図的視座でみることよりも、絵画的な人間の眼を重視したことであろうと述べている³⁰⁾。

さて、コスグローブ Cosgrove, D.E.によれば、風景 Landscape の語法については2通りある。1つは、15世紀初頭から19世紀後半の間に、まずイタリアとフランドル地方で、次いで西ヨーロッパ中で、風景概念が視覚の世界や、観察者によって眺められる光景の芸術的・文学的表現を示すようになったことである。もう1つは現代の地理学や関連の環境研究にみられるもので、地表の限られた部分に対して科学的調査の方法によって経験的に説明され、分析されることのできる自然的・人文的現象の統合を示している³¹⁾。原田ひとみは Cosgrove, D.E.の『社会構成体と象徴的風景』を論評する中で、次のように結論をまとめている。すなわち、「風景概念は結局、風景を創り出す能動的内部者と、それを観察する受動的外部者との経験を統一することはできない。従って、人間的な風景概念を宣言する地理学者は、風景の内包するこの矛盾を研究の出発点とすべきである³²⁾」と。さらに、風景を論ずる際には、Yi-Fu Tuan の『恐怖の風景』

について触れておかねばなるまい。本書の内容はかなり特異のテーマを扱っており、子供の成長時での恐れや自然の恐怖、自然災難と飢饉、中世世界における恐怖、病気の恐怖、魔女、幽霊、農村における暴力と恐怖、都市における恐怖、公共の屈辱と処刑、追放と幽閉、オープンなサークル等が論じられる³³⁾。昔のヨーロッパの人々や他の伝統の人々にとって、山や不規則に広がる森は恐怖の景観であった³⁴⁾。また、ダグラス・ポウコックはイギリスにおける多数の小説家の作品を分析しながら、北部と南部との対比を試みたり、工業地帯のはき出す煙で充満した風景や、鉱石の切りだしや採掘がもたらす醜くなった土地の様子などを紹介している³⁵⁾。千田稔はイー・フー・ツァンの「視覚と画像」の解題を試みる中で、次のように述べている。「伝統的な地理学は往々にして表面的な形とその特質の観察およびその記録をもって——たとえその因果関係を叙述したとしても——事足りりとしてきたことは事実である。それ故に、地理学の研究発表では風景のスライド写真がしばしば写し出され、地理学の教科書には風景写真や景色のスケッチが載せられることは、きわめて普通のことになっている。ところがツァンがこの論文において再三にわたってくり返すように、写真や絵によって得られるイメージは、見る者の思考を束縛することになる³⁶⁾」。或る意味で、写真や絵は読者をしてわかった気にさせてしまうが、内実は思考停止を招きかねないのである。また、Hugh C. Princeはジョージア王朝頃の風景について、18世紀後半のブリストル港のにぎわい、狩猟風景、肥育された巨大な雄牛、農村に出現した異国風建築、農家近くで働く農民、鉄工場で働く家族、テムズ川河畔で憩う人々など当時の絵画から説明している³⁷⁾。

次に、ライン河周辺地域における風景描写のいくつかを取り出し、考察を重ねてみたい。

4. ライン河周辺地域における風景

ライン河周辺について、筆者はリージョナル・ブックス『ドイツ文化と日本人』の中で、多数の写真や挿画を使って、沿岸の風景についての簡単な説明を試みたことがある³⁸⁾。J.ドルフェスはライン川と人間との関係について、ライン川上流から河口まで多数の写真を挿入しながら、ライン川の自然、歴史、交通、河川改修、港、支流と運河、水力発電、峠と道路、人口と言語、ラインの都市網、農業、工業、宗教、観光等の面から叙述している³⁹⁾。水津一郎はゲーテの『詩と真実』を中心にしながら、文献を使ってライン空間の都市の様々な風景を叙述し、解釈を試みている⁴⁰⁾。ラッツェルは百科辞典の絵、風景写真、挿絵を多用しながら、ドイツの国土と国民について絵のような叙述を試みている。例えば、次のような箇所がある。「古人は、彼等の築造物を好んで高い地点に建てたのみならず、彼等はそそり立つ塔や破風屋根をさへ造った。『尖塔の』通りは、ニュールンベルク、ヒルデスハイム、リューベックのやうな都會にとつては、もつと若い都會にとつて平たいことが特徴であるのと同様に、一つの特徴である。ゴシックほどドイツの風景に影響した様式はない。ケルン、シュトラスブルク、フライブルク、ウルム、レーゲンスブルクの高く聳える塔ばかりでなく、更に単純な、北部の大きな煉瓦造りの教會の塔もゴシックの子である⁴¹⁾」。ヴィクトル・ユゴーは『ライン河幻想紀行』の中で、ライン河の様々な風景について興味ある記述を残しているのので、以下いくつか抜き書きしてみたい。

ライン狭谷のザンクト・ゴアールからみたライン河の風景について、次のように述べている箇所がある。「ザンクト・ゴアールでは、ラインはもはや河ではない。湖である。四方八方を閉

ざされている正真正銘のジュラ系地質の湖である。兩岸は暗い影を落としてそびえたち、水は深みのあるきらめきをたたえ、波音はすさまじい。ここからながめていけば、一日じゅうでも、ラインの奇観を楽しむことができる。筏、細長い帆かけ船、小さな快速船、八艘から十艘くらいの乗り合いの蒸気船が行きかて、河を上下し、まるで大きな犬が旗で飾られ、煙を吐きながら泳いでいるように波音をざぶざぶ立てて、たえまなく通過していく⁴²⁾。「ライン河にはあらゆるものが結びついている。ラインはローヌ河のように流れが速く、ロワール河のように河幅が広く、ムーズ河のように峻嶮で、セーヌ河のように曲折し、ソナム河のように緑に澄み、テベレ河のように歴史豊かで、ダニューブ河のように荘厳で、ナイル河のように神秘的で、アメリカの河のように金モールで飾りつけられ、アジアの河のように寓話と幻に満ちている⁴³⁾」。

『ヨーロッパの南北軸』の中で人々の生活を生き生きと描いたジュイヤールは、ライン空間のぶどう栽培地域の風景を次のように叙述している。「都市の特権が得られた時期、つまり14世紀起源が普通である城壁、ルネサンス風の市役所、これら自由の象徴、小麦用倉庫、ぶどう酒の質を保証していた〈鑑定家〉の看板、狭くて曲折し、しばしば行き止まりの道路周辺の密集家屋、家々はすべて地下室と圧搾機を備えている⁴⁴⁾」まるで家々の間をゆっくりと歩いているかのような錯覚にとらわれよう。「今日のドイツのぶどう園の拡大は目覚ましい。同緯度で同じ暑さの夏を見つけるには、西ではローヌ谷の奥まで、東ではプラハやリンツまでゆかねばならない。しかし、冬は比較的穏やかなので、ライン地溝帯の春は早い。コルマールでは、りんごは4月18日開花しはじめ、29日にはライン中流部の全地域で開花する。一方、ミュンヘンでは5月10日、プラハで5月5日までりんごは開花しない。

美わしの5月は、無疵のぶどうとバラのきずなで廃址を飾った。

ラインの風は、岸辺の柳やおしゃべりの葦や、ぶどうの無垢の花を揺する。

(G.アポリネール、アルコール)⁴⁵⁾。

ライン河周辺の風景が詩情豊かに描写されているのがわかる。地理学は元々詩情あふれる記述が読者を魅了したのではなかったろうか⁴⁶⁾。都市については、次のような描写がある。「幾つかの記念建造物、すなわちレーメル(市役所)、ゲーテハウスは忠実に修復された。しかし、現在のフランクフルトは新都市の景観を示し、風通しは良いが公園内の幾つかの巨大なビルディングを除けば、見事とはいえない。しかし、そこは実践的で活気を帯び、豪華で非常に高いホテル施設を備えている⁴⁷⁾」。

地理学者はどこへ行っても一番高い所に登って、周囲の景色を観察せよとはよく言われることであるが、ゲーテは2年間学業を積んだシュトラスブルク(現在はストラスブール)において、旅館で旅装を解いた後、大寺院の高台にすぐ登っている。「かうして私は屋上から或る期間自分が住まふことを許された美しい土地を眼の前に見た。立派な市街、鬱蒼とした樹木が一面に綾模様となつてゐる開豁な四邊の郊野、ラインの流れに沿うて岸や島や中洲を描き出してゐる草木の目立って豊かなさまなどが見えた。南から傾斜して擴がってゐるイル川の流域の平野もこれに劣らず濃淡種々の緑に飾られてゐた。……⁴⁸⁾」とアルザスの美しい風景を叙述している。パリに客死した森 有正もストラスブールを何回も訪れているが、次のように描写している。「ストラスブールのみぞれをおとす灰色の冬空に立つ赤黒いカテドラル(……)、その内部の黄の勝った美しいヴィトロロー、降りしきる豪雨の中に、人気もない夕暮のライン河の河岸に立つ起重機や倉庫⁴⁹⁾」と、旅の孤独を思い起させる映像的表現である。

5. おわりに

美しい風景が長年月、それを見慣れている人々にどのような影響を与えているか、あるいは全く与えることがないのかは興味のある点である。日本人の精神的象徴である富士山を例にとり、「美しい風景は人間の精神にすぐれた効果を及ぼす」といった命題を検証すべく、「毎日富士山を仰いでどのような気持を持ちますか」という項目を問うた千葉徳爾は、「何も考えない」という答えが90%以上占めたのに驚くとともに、アンケート調査の限界についても触れている⁵⁰⁾。

本稿は、アンケート調査をも含む実証的研究の立場からではなく、内外の文献を基に、風景概念に関して若干の考察を試みてきたものである。それも Relph, E. が統計処理を主体とするいわゆる科学的地理学について述べている如く、主観性を重要であるとするアプローチを落したり、コミュニティや景観の個性、特色を否定する限り、科学的地理学は誤りである⁵¹⁾という考えに共感を覚えるからである。それゆえ、本稿では客観の色合いの濃い景観という地理学独自ではあるが、使い古された用語ではなく、人間をもその中に取り込む風景という用語を中心に、論を展開してきたわけである。森 有正がヨーロッパ滞在の中で思索を深め、次のように述べる時、風景のもつ意義の一面が浮彫にされよう。「目の前の風景は、千古揺がない確かさで、人間の文化の自然に根ざす性格を語っている。その表面の文化現象や思想現象だけを切り離して学ぶことにどれだけの意味があるのだろうか⁵²⁾」。つまり、風景には歴史的背景が隠されているのである。ダヴィッド・ハーヴェイは、パリのモンマルトルの丘にそびえるサクレクール寺院建立に至る歴史的経緯を詳細に語った後、次のように終っている。「この建物はもの寂しい静けさの中で秘密をおおい隠している。このような歴史を知り、この場所を飾りたてることに賛成あるいは反対して戦った人々の根本方針を理解している人だけが、そこに葬られている秘密を本当に掘りおこすことができ、そうすることによって、あの豊かな過去の経験を死んだような墓場の静けさから救いだし、ゆりかごとという騒々しい初めの頃に変えることができるのである⁵³⁾」。

以上、本論でも検討してきたように、風景が語りかける意味を解読することも、地理学の新しい研究視角となりえよう。景観という地理学特有の概念規定・内容に固執するあまり、風景概念の有する豊かな意味内容の分析を無いがしろにしてはならないのである。風景の根底に横たわる長年の月日の経過を考える時、風景は歴史的方法によって解明されるべき対象である。

注

- 1) 大嶽幸彦「人間主義の地理学に関する覚書き」地理学評論 61 (Ser. A)-1, 49~57, 1988
- 2) 辻村太郎「景観地理学講話」地人書館, p. 244, 1937
- 3) Norton, W. 「Historical Analysis in Geography」 Longman, p. 62, 1984
- 4) 竹内啓一「解題——歴史地理学研究における空間認知——」歴史地理学紀要 27, p. 10, 1985
- 5) 山野正彦「観相学的視角について」大阪市大人文研究 35 巻第 10 分冊, p. 16, 1983

- 6) 高野史男「史観・地理観・世界観——中南米巡検からの考察——」立正大学地域研究 26 巻第 1 号, p. 1, 1985
- 7) ボルノウ著, 大塚・池川・中村共訳「人間と空間」せりか書房, p. 70, 1978
- 8) モル, ロメル共著・渡辺 淳訳「空間の心理学」法政大学出版会, p. 148, 1983
- 9) 前掲 8) p. 128
- 10) 内田芳明「風景の現象学」中央公論社, p. 187, 1985
- 11) 西川 治「印象と記録に残る旅と旅」地理 32 巻 12 号, p. 32, 1987
- 12) 西岡秀雄「風土と生活」千曲秀版社, p. 283, 1974
- 13) 大嶽幸彦「風土と人間への地理学的アプローチ——ヨーロッパの風土と日本人を例として——」神戸大学教養部紀要「論集」26 号, pp. 35~36, 1980
- 14) 和辻哲郎「風土——人間学的考察——」岩波書店, p. 76, 1935
- 15) 千葉徳爾「はげ山の文化」学生社, p. 102, 1973
- 16) 小田内通敏「帝都と近郊」有峰書店, 1918 年発行, 1974 年複製版, 216 P.
- 17) 石井 實「日本における地理写真の発達に関する研究」地理学評論 56 巻 7 号, p. 464, 1983
最近, 石井 實は「地理写真」についての本を著わした。石井 實「地理写真」古今書院, 255 P., 1988
- 18) 尾留川正平「砂丘の開拓と土地利用」二宮書店, 274 P., 1981
- 19) 田辺 裕「歴史の舞台としての風土」井上幸治編「ヨーロッパ文明の原型」所収, 山川出版社, pp. 65~112, 1985
- 20) 水津一朗「石の文化・木の文化」古今書院, 262 P., 1969
- 21) 正井泰夫「アメリカとカナダの風土」二宮書店, pp. 7~8, 1985
- 22) 内田順文「地名・場所・場所イメージ」人文地理 39 巻 5 号, p. 395, 1987
- 23) 竹内啓一「ヨーロッパの文化地理」西川 治編「人文地理学の基礎」所収, 放送大学教育振興会, p. 187, 1988
- 24) 西川 治「地理学 A・B・C」地理 29 巻 8 号, 1984
- 25) 藤岡謙二郎編「最新地理学辞典」新訂版, 大明堂, 623 P., 1979
- 26) R.J. Johnston, ed. 「The Dictionary of Human Geography」Blackwell, 411 P., 1981
- 27) 竹内・正井編「地理学を学ぶ」古今書院, p. 137, 1986
- 28) 前掲 2) p. 1
ドイツ地理学におけるラントシャフト論に関しては, 手塚 章が地理学におけるさまざまなラントシャフト概念の系譜を整理し, 1950 年代前後に展開されたラントシャフト論が現在においても, 地理学理論の重要な基盤として継承されている点を明らかにしている。
手塚 章「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」筑波大学人文地理学研究 XI, pp. 139~164, 1987
- 29) 千田 稔「風景のナショナリズム——志賀重昂と正岡子規——」奈良女子大学地理学研究報告 III, p. 136, 1988
- 30) 前掲 29) p. 142
- 31) Cosgrove, D.E. 「Social Formation and Symbolic Landscape」Croom Helm, p. 9, 1984
- 32) 原田ひとみ「コスグロブ：社会構成体と象徴的風景」歴史地理学 131 号, pp. 42~45, 1985
- 33) Yi-Fu Tuan 「Landscapes of Fear」Blackwell, 263 P., 1979

- 34) 前掲 33) p. 7
- 35) ダグラス・ポウコック「小説家の北のイメージ」千田 稔訳編「地図のかなたに」所収, 地人書房, pp. 181~219, 1979
- 36) 千田 稔訳編「地図のかなたに」地人書房, p. 177, 1979
- 37) Prince, H.G. 「Georgian Landscapes」 A.R.H. Baker et al. ed. 「Man made the Land」 David & Charles, pp. 153~166, 1973
- 38) 大嶽幸彦「ドイツ文化と日本人」古今書院, p. 185, 1979
- 39) J. Dollfus 「L'Homme et le Rhin」 Gallimard, 398 P., 1960
- 40) 水津一朗「城壁都市の文化」伊東他編「西ヨーロッパと日本人」所収, 研究社出版, pp. 103~142, 1976
- 41) ラッツェル著・向坂逸郎譯「ドイツ」中央公論社, p. 277, 1941
- 42) ユゴー著・榊原晃三編訳「ライン河幻想紀行」岩波書店, p. 66, 1985
- 43) 前掲 42) p. 12
- 44) ジュイヤール著・大嶽幸彦訳「ヨーロッパの南北軸」地人書房, p. 47, 1977
- 45) 前掲 44) p. 9
- 46) 内容的には問題があるとしても, 志賀重昂の「日本風景論」が明治時代後半にベストセラーになり, 版を重ねたのも, 多数の名所図絵を取り入れながら詩的に叙述した文章の力に預るところ, 大であったであろう。
志賀重昂「日本風景論」政教社, 221 P., 明治 27 年
- 47) 前掲 44) p. 272
- 48) ゲーテ著・小牧健夫訳「詩と真実」第二部, 岩波書店, p. 184, 1941
- 49) 森 有正「バビロンの流れのほとりにて」筑摩書房, p. 120, 1968
- 50) 千葉徳爾「地域と民俗文化」大明堂, pp. 1~2, 1977
- 51) Relph, E. 「Rational Landscapes and Humanistic Geography」 Croom Helm, p. 142, 1981
- 52) 前掲 49) p. 120
- 53) ダヴィッド・ハーヴェイ「モニュメントと神話」千田 稔訳編「地図のかなたに」所収, 地人書房, p. 263, 1979

Some Reflection on Landscape Concept in Geography

Yukihiko OHDAKE

ABSTRACT

In this study I tried to give some reflection on Landscape Concept on the basis of domestic and foreign bibliographies, not from a point of view of Study in Positivism including a research through questionnaire. This study was developed with bringing the term, "Fūkei" which includes even human beings on focus, instead of "Keikan" which is subjective and specific to Geography, but hackneyed. Not only geographical works, but also literary works were studied as materials.